永遠は刹那のなかに　　第二部

忍者猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠は刹那のなかに　第二部

【Ｎコード】
Ｎ９４７０Ｏ

【作者名】
忍者猫

【あらすじ】
五年前の世界、それも同盟にタイムスリップしたミッターマイヤーの物語。
コンセプトは、『銀英伝版紺碧の艦隊』。
いや、あんな奇想天外兵器は出しませんが、奇想天外親父はいます。
後、隙間を埋める為、色々人員を補充しています。

これは『リップシュタット戦役』の頃をメインに置いています。

1．帝国潜入

帝国暦四八八年、宇宙暦七九七年、三月。
ウォルフガング・ミッターマイヤーとガウェイン・クラスターの二人は、大量の書類を抱えて役所の中をうろうろしていた。
但し、ミッターマイヤーは蜂蜜色の金髪を朱色に染めて、ガウェインは金茶の瞳を緑に変えて、だが。
「えーと、カール・リヒター少佐？」
「はい」
書類とミッターマイヤーとを見比べると、係官は面倒臭そうに判を押す。
その横で、そろそろ退役らしい老係官が、ガウェインに書類を返す。
「ガウェイン・フォン・ウェーバー曹長っと。手続きは明日からになりますから、結果は来週の水曜日に報告されます。取り敢えず、適当なところで待機しててください」
「はあ」
書類を受け取って、ガウェインの方は少なからずうんざりした表情になる。
ミッターマイヤーの方も同じようなものだが、曲がりなりにも佐官である彼には、官舎の割り当てがされた。
取り敢えず、同じ便で手続きに来たと言うのを言い訳に、二人は並んで軍務省を後にした。
「どうかしました、少佐」
「いや、ちょっと……」
自分の身分章を見ながら、ミッターマイヤーは何事か言いたげに眉を顰めている。
ガウェインの方は、困ったように頭を掻いて彼の袖を引っ張った。
「気持ちは判りますけど、でもそのお蔭でここにいるんだって事、

自覚してくださいね？」
小さな声で釘を指され、不承不承ながらミッターマイヤーは頷いた。

二人は今、ヤン・ウェンリーからの特命で帝国に潜入していた。
『これから帝国で起こる事を、見て来て欲しい』
そう言われて、捕虜交換の行われた日にイゼルローンから送り出された。
フェザーン商人　――　彼はヤンの昔馴染みであり、ガウェインともミッターマイヤーとも顔見知りであった　――　の裏ルートを利用して帝国に入った二人は、予備役扱いになっている行方不明者の戸籍を利用して、軍に潜り込む事となったのだ。
最初、ミッターマイヤーはかなり不安を感じていたのだが、今は全く書類を疑問視する事の無い係官に、逆にふつふつと怒りを覚えていた。
それに向かって、ガウェインは訳知り顔でこう切り返す。
「それだけ、帝国官僚とフェザーン上層部がしっかり結び付いてるって事ですよ。ついでに言うと、多分同盟だって、同じ状態と思いますよ。だって、フェザーンは二つの勢力の間で、政治バランスを取る事で成り立っていますもの。情報戦略の為に、スパイなり賄賂で手懐けたりなり、色々やってると思いますね」
十五かそこらの子供の発言ではない。
だが、ガウェインが母子家庭育ちで、色々苦労していた事は帝国に来る途中に、船の中で彼の馴染みだと言う船員達から聞かされていた。
だから、その言葉はしっかりしていて、そこが哀しいとミッターマイヤーは思ってしまった。
年上の同行者の気持ちを知ってか知らずか、ガウェインは知り合いから入手したという特殊変装薬を持って来た。

飲むと、体毛や瞳孔の色素が濃くなるという代物だった。
尤も、体質の問題でガウェインは飲めないので、自分用にカラーコンタクトを用意していたが。
「効き目は折り紙付きですよ、フェザーン警察の潜入調査官ご用達ですから」
よくよく話を聞くと、彼の馴染みにフェザーンの公的司法組織に奉職する人間がいて、そこから譲って貰った物だそうだ。
取り敢えず、ミッターマイヤーはその薬を使って、赤味の強い金髪と青みがかった翠色の瞳を持つ『カール・リヒター少佐』となって、帝都に戻ったのである。

帝国、特に帝都の空気はざわついていた。
ミッターマイヤーには、覚えがある空気だった。
ほんの数週間前に、所謂『リップシュタット盟約』が結ばれており、貴族達は行動を起こす機会を今や遅しと待ち構えている、そんな時期であった。
軍務省省舎から出て来たところで、ミッターマイヤーは通りすがりの士官三人組に突き倒された。
「少佐、大丈夫ですか！」
慌ててガウェインが駈け寄るが、当の士官の方はじろりとミッターマイヤーを睨んで、そのまま歩き去って行った。
この三人に、ミッターマイヤーは見覚えがあった。
あのフレーゲル男爵の腰巾着として、あの時留置所にやって来た貴族の子弟達だった。
鼻に付くほど、貴族である特権を並べ立てるあの三人すら、ぶつかった平民に突っ掛かる余裕を失っている事に気付いて、ミッターマイヤーは知らずに息を飲んでいた。
「大丈夫かい？」
不意に声が掛かって、ミッターマイヤーに手が差し伸べられた。

「あ、はい、ありがとうございます」
その手を取ってから、差し伸べた相手を見てミッターマイヤーは胸の内でびっくりした。
そこで彼の手を取り立たせてくれたのが、あのオーベルシュタインの下に付く事になる毒舌家、アントン・フェルナーだったからだ。
ところが、フェルナーの方は立ち上がったミッターマイヤーに向かって、かつて無いほど優しげに微笑み掛け、そしてガウェインと共に散らばった書類を拾い集めてくれた。
「大変だったね。でも、いちゃもん付けられなくて何よりだったよ」
そう笑い掛け、行き先が一緒だからと官舎まで送ってくれたフェルナーを見送りながら、ガウェインは頬を掻き掻き質問する。
「えーと、お知り合い？」
「いいや。そもそも知り合いなら、もっと違う反応だと思わないか？　今俺、変装して偽名使っているんだよ？」
「それもそうですね」
そう、この時期、本来ミッターマイヤーとフェルナーとの間に接点はない。
この頃のフェルナーと言えば、ブラウンシュバイク公の配下だった筈で、噂では諜報系の幕僚として、平民ながら重用されていたと聞いている。
「じゃあ、知り合いに似ていたとかという理由で、親切にしたいって思われたのかな？　それなら、何となく納得出来るし」
「どうだろう……」
二人がそう語り合っていた頃、アントン・フェルナーはささやかな幸せを噛み締めていた。
世の中、『よく似た人間が三人はいる』とよく言われている。
だが、そうそう会えるものではないとも思っていた。
何しろ一年前、そう言う『よく似た人間』の一人を、あえなく救いそびれてしまったのだ。

こうして出会った以上、彼の幸せを祈って何が悪い？
薄幸の内に生を終えねばならなかった『兄』や、
あの誠実で誠意に溢れるが故に貴族達に踏みにじられた青年の分まで、
彼に幸せになって欲しいと願って何が悪いのか。
そうして彼は、己の唯一無二の共犯者の元へ向かった。

ミッターマイヤー、否『リヒター少佐』に宛がわれた官舎は、２ＬＤＫのちょっと広めのものだった。
但し、どうもここ数年使われていなかったらしく、締め切られた建物の中は黴と埃と淀んだ空気に支配されていた。
しかし、そこは大掃除と設営が任務の一環にある陸戦隊経験者のミッターマイヤーと、母子家庭で母親の為に家事の一切を取り仕切っていたガウェインの二人である。制服を脱ぐと、二人はそつ無く掃除に取り掛かった。
二時間ほど掛けて、何とか目処が立ったところでガウェインは買い物に行くと言い出した。
「台所の中、食料も調味料も無いんですもの。来る途中で商店街を見掛けましたから、そこまで行って来ますね」
「一人で大丈夫かい？」
そう聞いたミッターマイヤーに、ガウェインはにっこりと笑い返す。
「大丈夫ですよ、俺は毎日の事でしたし。それに、すみませんけど、張り替えたシーツ、洗濯機に入れて置いてくださいね、他の汚れ物と一緒に、後で洗っちゃいますから」
それだけ言うと、ガウェインは財布を片手に家を出た。
地形把握も兼ねていたが、取り敢えずガウェインはお腹が空いていたのである。

三〇分後、ガウェインはちょっと後悔していた。
夕飯と明日の朝の分の食料品に、最低限の調味料、そしてつい欲しくなったコーヒー豆とコーヒーメーカーとカップ類に、お茶受け用の焼き菓子の特用袋。
ここまでは、リュックタイプの買い物袋を買う事で対処出来ると踏んでいた。ところが、たまたま野菜を買い込んだ店の主が、人の良さそうな老婆だったお蔭で、ソフトボール大のオレンジ五個がおまけに付いて来てしまったのだ。
好意で貰ったものである。何処にも苦情を申し立てる先が無いまま、ガウェインは今にもはち切れそうな紙袋を抱え、行商人のような大荷物を背負って、官舎まで戻ろうとした。
ところが、当然のように紙袋は破け、オレンジが一つ、ころころころっと転がって行ってしまった。
慌てて追い掛けたガウェインの目の前で、転がったオレンジはベンチに腰を降ろす、赤毛の高級軍人の足に当って止まった。
疲労で蒼褪めた顔をしたその若い軍人は、足に当ったオレンジをひょいっと拾い上げた。
そして、ガウェインが声を掛けるより早く、そのオレンジをかりっと齧っていた。途端に広がったオレンジの香気と、皮の苦味にはたっと我に帰ったその青年は、茫然自失と言った態で自分を見る大荷物を抱えた子供に気付いた。
その子の腕の中の紙袋とそこから覗くオレンジと、自分が齧ったオレンジを思わず見比べ、そこで始めて青年　――　ジークフリード・キルヒアイスは自分のした事に気付いて飛び上がった。
「ご、ごめん、君のオレンジだったんだねっ！」
あたふたと齧ってしまったオレンジをお手玉してしまう青年に、ガウェインはくすっと笑ってこう返した。
皮付き、しかも石畳を転がったオレンジを齧った相手に驚いていただけであるガウェインは、
「構いませんよ、向こうの八百屋でおまけに貰ったんです。よろし

かったらどうぞ。二人じゃ、食べ切るのに時間掛かっちゃいますから」
と告げて、そのまま帰ろうとした。
「い、いや、それは別の問題だよ」
キルヒアイスは慌てふためいて、歩いて行こうとした少年を引き止めた。
如何に疲れていたとは言え、子供に好意で与えられたものを取ってしまったと言う事実は痛かったのだ。そこで、オレンジを貰う代価と称して、キルヒアイスはガウェインに荷物を運ぶ手伝いを申し出た。
流石に、上級大将の階級章をつけた相手からのその申し出を、今度はガウェインが真剣に断りを入れた。
しかし、実は頑固者であるキルヒアイスの方が、半ば強引に紙袋と手に下げていた袋の一つを引き取ってしまった。
そこまでされてはガウェインも断り切れず、キルヒアイスを官舎まで案内する事になった。

猫の額ほどの庭で、マットレスに風を当てていたミッターマイヤーは、ガウェインと共に現れた人物に流石に目を丸くした。
「き、キルヒアイス提督?！　あ、あの、ウェーバー曹長が何か」
慌てて敬礼する緋色の髪の青年に向かって、キルヒアイスは穏やかに微笑んで首を振った。
「いいえ、私が彼に迷惑を掛けてしまったんですよ。ガウェイン君、彼が同居人の方ですね」
「はい、リヒター少佐です。行く宛てが無いって自分が言ったら、一緒にと言ってくださったんです」
ガウェインの答えに、どうやら道々話をしていたらしいと当たりをつけたミッターマイヤーは、同時にキルヒアイスの顔色に内心うろたえてもいた。

顔色の悪いキルヒアイスの顔に、一瞬だがあの時の白い顔が重なったのだ。
「ガウェイン、何か飲み物買って来ただろう？　閣下、折角ですからコーヒーでも飲んで行って下さい」
だから、その言葉は咄嗟のもので。今度はキルヒアイスの方が断り切れずに、官舎に立ち寄る事となった。
ガウェイン用のカフェ・オ・レと、たっぷりのクリームとスティックシュガーを添えたコーヒー、そしてマーマレードを乗せた軽焼き菓子で、少し遅めのコーヒータイムが始まった。
尤も、ミッターマイヤーはキルヒアイスに出すコーヒーに、無塩バターの大きな塊と、蜂蜜を少したらした。
「疲れた時には、これの方が身体にいいんです。昔、友人がよく飲ませてくれたものです」
昔、ロイエンタールがミッターマイヤーだけの為に作ったものである。
それを受け取りながら、キルヒアイスは改めて二人の素性　――　正確には設定だが　――　を聞いた。
「そうでしたか。お二人とも復帰直後なんですか」
「ええ。お恥ずかしい話ですが、暫くフェザーンの方の病院にいまして。ウェーバー曹長の方は、視覚異常の治療だったそうです」
にこりと笑い返すガウェインを見ながら、キルヒアイスはバター入りコーヒーを啜った。意外に、キルヒアイスの好みに合う味だった。
とその時、何かに弾かれたように、キルヒアイスはカップをテーブルに戻した。
思わず腰の浮いた二人の前で、キルヒアイスはポケットに入れていた携帯端末を取り出した。端末の画面を暫く見ると、軽く目を閉じてから二人に向き直る。
「すみません、部下の者が探していますから、私はこれで失礼します。リヒター少佐、そしてガウェイン君、コーヒーご馳走様でした」

「いいえ、大したおもてなしも出来ませんで」
そう言って敬礼する、ガウェインの頭を軽く撫でると、キルヒアイスはミッターマイヤーに一礼して官舎を後にした。
「……あの噂、本当かな」
キルヒアイスの背を見送りながら、ガウェインは小さく囁いた。
「何が？」
「うん、キルヒアイス提督と、ローエングラム伯、いや候との間に溝が出来てるって話」
ガウェインの言葉に、それこそ鳩に豆鉄砲の態でミッターマイヤーは目を見開いた。
彼の感覚では、あの『ヴェスターラント』が起こるまで、あの二人に溝なぞ生じる筈が無いからだ。
だが官舎に入ると、ガウェインはミッターマイヤーに向かって、フェザーンで流れていた噂を話して聞かせた。
「どうも、穏健な手段を取りがちなキルヒアイス提督より、苛烈で武力で事態を手っ取り早く収拾する案を出す幕僚の方に、最近ローエングラム候が肩入れしているらしいんです。その所為で口の悪い人間からは、最近『過去の人』呼ばわりされているそうですし」
「な、なんだよ、それ」
これだけでも信じられないのに、ガウェインが口に上らせた名前に、ミッターマイヤーはその場に座り込むほどの衝撃を受けた。
「とにかく、幕僚会議とは名ばかりで、殆どオーベルシュタイン中将とロイエンタール大将とが取り仕切っちゃってて、他の提督達にも発言させないけど、キルヒアイス提督は特にマークされてるって噂です……ミッターマイヤーさん？！」
「だ、大丈夫だから」
そう答えつつ、ミッターマイヤーの頬からは血の気が引いていた。
親友の行動が信じられないのもあるが、それ以上に事態を不味いと感じていた。
『キルヒアイスのいないラインハルト』を見て来た彼にとって、

この状況の果ては恐怖でしかなかった。

二日後、たまたま再会したキルヒアイスに転属を希望して、ガウェインとハンス・エドアルド・ベルゲングリューンを（別の意味で）引っ繰り返させる事になる。

素性がばれる危険を犯そうとも、キルヒアイスを護ろうと考えたミッターマイヤーのこの行動が何を起こすのかは、先の話となる。

2．嵐の予感

時代は動き出した。
朽ち果てた黄金樹を引き倒すべく、金色の獅子が遂に立ち上がる時を迎えたのだ。
その獅子の影で、一匹の狼は自問する。

『自分はここで、何をすべきなのか』と。

シュワルツェンの館への襲撃から端を発する、反帝派貴族達の脱走から三日後。
「相変わらず、山鯨だよねえ、君は」
長年の腐れ縁であるフォルカ‐・アクセル・フォン・ビューローの言葉を、ハンス・エドアルド・ベルゲングリューンは黙殺した。
彼は今、新たに迎えた幕僚の為のマニュアル作りに勤しんでいたからだ。そんな友人に、ビューローは広い肩を竦めてこう言った。
「まあ、いいけどね。しかし、これから暫く荒れそうだねえ」
その言葉に、ベルゲングリューンは顔を上げ、黒髪の友人が見ている窓に目をやり首を傾げた。
「いい天気じゃないか」
ベルゲングリューンの返答に、ビューローは何も答えなかった。

その頃。新任キルヒアイス艦隊司令部付き士官カール・リヒターことミッターマイヤーは困っていた。
「閣下、閣下、生きてらしたんですねぇっ！！」
出会い頭に、突き飛ばす要領でドカンとぶつかって来た青年将官に、ミッターマイヤーはがっしりと抱き締められおいおい泣かれて

いるのだ。
　これが誰かは、（痛い話だが）判っている。
（……バイエルライン、あのなあ）
　頭っからしかりつけたいのを我慢して、ミッターマイヤーはきっとカール・エドワルド・バイエルラインを睨み付けた。
「少将閣下、職務中にこのような真似をされては困ります。小官は只今勤務中です！」
　ピシャっと言い切られて、ダークブルーの瞳が見開かれる。
　それが一気にうるうると涙で潤み、バイエルラインはミッターマイヤーの思いもしなかった事をぺらぺらと喋り始めた。
「あああああ、そんな、閣下、怒ってらっしゃるんですね。ロイエンタール提督に任せて、何も行動を起こさなかった吾々を。そうですよね、吾々も行動を起こしていれば、奥様をちゃんとお助け出来たでしょうに」
　思いもよらない言葉に、思わず聞き返そうとしたその時だ。
　通りすがりのフリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトが、ついうっかりバイエルラインの後頭部に膝を入れてしまった。
　これまた当然のように、バイエルラインは綺麗に昏倒してしまった。
「あ、すまん」
「うわっ、（バイエルラインっ！？）」
　ぐったり崩れ落ちるのを、抱き止めて揺するが反応は無い。
「あっちゃあ、済まんな」
　そう言って、ビッテンフェルトは一瞬じっとミッターマイヤーの顔を見た。
　だが、ミッターマイヤーが視線を合わせると、何も無かったようにオレンジ色の髪の将帥は言って寄越した。
「こいつは、こっちが責任持って医務室に投げ込んでやるから、貴官は用事を済ませて来たらどうだ？　それは午後の会議の資料だろう？」

ビッテンフェルトの言葉に恐縮し、ミッターマイヤーはその場を離れることにした。
肝心な事は聞けず仕舞いになってしまったが、取り敢えず『リヒター少佐』としての職分を優先させると、ミッターマイヤーは最後のファイルを届けに向う事にした。
だから、自分の背中を凝視する猪提督には気が付かなかったのである。

その頃、フォン・ウェーバー曹長ことガウェインはキルヒアイス艦隊司令部付き下士官として、元帥府内部を歩いていた。
それは襲撃の二日前、再会したキルヒアイスに向かって『カール・リヒター少佐』ことミッターマイヤーの、強引な転属志願に同行する事になった為である。
事が事だけに、流石にガウェインは後で問い詰めたのだが、憔悴したキルヒアイスに度を失ったミッターマイヤーは、後で面倒が増えるのを覚悟の上で、転属を願い出ていた。尤も、生来の感激屋であるベルゲングリューンによって、横紙は総て破られてしまったが。
そんな訳で、キルヒアイス艦隊所属となったミッターマイヤーとガウェインとは、それぞれ他の士官達に頼まれた用事をこなすべく別行動を取っていた。　その途中で、ガウェインは半白髪の将官に付いて歩くフェルナーの姿に気が付いた。
向こうの方も、書類ファイルを抱えて歩くガウェインに気付いて、将官に何事か告げるとそのまま側へと駈け寄った。
無論、彼はつい先ほど自首して来て、パウル・フォン・オーベルシュタイン預かりになったばかりだった。
「ガウェイン君、本当にこちらの配属になったんだねぇ」
そう言って、穏やかに話を切り出したフェルナーに、ガウェインも笑顔を向けた。
「フェルナー大佐。あれ、大佐も転属ですか？」

「んー、まあそんなものかな。ところで、リヒター少佐は？」
曖昧に笑いつつそう尋ねるのに、ガウェインは屈託無く答えた。
彼からすると、ちょっと怪しいがそれほど危険では無さそうと言うのが、フェルナーに対する評価だったので。
「リヒター少佐なら、今他の提督方に、次の会議の議題を収めたファイルを配ってらしてますよ。自分はこれから、経理部の方にこのファイルを届けに行くとこです」
「そうかい、お疲れさん。じゃあ、私はこれから新しい上司と、これからの仕事に付いて話があるから」
「はい、又今度」
そう言って別れると、ガウェインはパタパタと数階下の経理部へと走って行った。
だから、その後ミッターマイヤーがロイエンタールと起こした悶着も、フェルナーとロイエンタールの間に生じた因縁も、更にもう一人一方的な遺恨が生まれた事も全く知らなかったのである。

その日の午後、貴族連合への対策の為に幕僚会議が招集された。
本来、地位と所属上ミッターマイヤー、いやリヒター少佐は会議に参加する事が出来ない。
そこで、ミッターマイヤーは会議室に飲み物を運ぶ従卒に声を掛け、代わりに運ぶと言う名目で会議室の横に潜り込んだ。
耳を澄ましていると、ローエングラム候の出した案に沿った、キルヒアイスが提示する補足案にロイエンタールとオーベルシュタインが質問　――――　と言うよりいちゃもん　――――　をぶつけると言う状態であるらしい。
何時もの事らしく、他の提督達はうんざり顔で事態を見詰めるだけのようだ。
戸をすかして覗いて見ると、ラインハルト・フォン・ローエングラムと言えば何処と無く上の空で二人に言いたいだけ喋らせ、キル

ヒアイスを弁護する気も無い様だった。
その中で、ロイエンタールは冷静に言い放った。
「貴族も、平民も兵士も、総てはローエングラム候を帝位に押し上げる為の駒に過ぎない」
その言葉は、マキャベリズムからすればけして間違ったものではなかった。
だが。

パーンッ！

それは、突然会議室に入って来た一人の緋色の髪の青年の右手と、ロイエンタールの端正な片頬とが立てた音だった。
呆然と幕僚達が ―― ラインハルトすら ―― 見守る中、青年はぽろぽろと涙を零し、ロイエンタールを睨み付けながら搾り出すように言った。
「勝つ為なら、何をしても良いと言うのか？　勝てば、何をしても許されるのか？　力弱き者は、強き者の道具だと言うのかっ！　それでは《禿鷲の城》（ガイエスブルグ）の、貴族達と何が違う。少なくとも、それが間違っていると思うから、ローエングラム候の幕下に付いたのではないのか」
「リヒター少佐」
拳を振るわせるミッターマイヤーに、気遣わしげにキルヒアイスが声を掛ける。
その声にはっとなると、涙を拳で拭いミッターマイヤーはロイエンタールに頭を下げた。
「佐官の身で、大将閣下に失礼しました。小官はこれから、憲兵に出頭し軍規の沙汰を待ちます」
そうして、踵を返そうとしたミッターマイヤーの腕を、ロイエンタールは思わず掴んで引き戻そうとした。
そこに、冷え込むような声が制止を掛けた。

「リヒター少佐。貴官の行為は確かに軍規に触るが、現在我がローエングラム元帥府は出撃を控えて人手を必要としている。本日より三日間の謹慎の後、直属の上官による監視の元勤務に復帰するように」
オーベルシュタインの発言は、周囲もだがミッターマイヤーを驚かせた。
そして、事態に面食らったロイエンタールが反論する前に、びしっと嫌味を叩き付けた。
「何しろ、少佐は卿からすれば駒にしかならぬ平民だ。だが、ゴールデンバウムの悪習を、この元帥府に持ち込む事は認めがたい事だ」
「……何が言いたい、オーベルシュタイン」
「上位の者が、下位の者に侮辱されたからと、地位と腕力に訴えるような真似は認めないと言っている。この場合は監督不行き届きとして、直属の上司への訓告と、当人の入営が妥当だが、緊急事態ゆえに、当人の謹慎と上官への訓告にするべきだと言っている」
聞いていると至極真っ当で、ついでに何の私情無く話しているように見えるが、実はオーベルシュタインが私情塗れで話を終らせようとしている事を、ここにはいないフェルナーだけが知っている。
貴族に殺された親友生き写しの青年を前に、周囲に気付かれる事なく私情に走っているのだ。そして年の功の分だけ、ロイエンタールよりオーベルシュタインの方が舌戦に分があった。
「こりゃ、近年稀に見る楽しい事態になったな」
ビッテンフェルトが、遠慮の無い声で呟く。メックリンガーも、横のケスラーにそっと囁く。
「例えるなら『鴻門の会』の勇者ですな」
「だが、確かに無茶をする。佐官で大将に手を上げるとは」
「それにしても、なんだか風向きが変ですね？　ロイエンタール卿、怒ってるのはオーベルシュタイン卿に向かってで、佐官の彼に向かってでは無いようですよ？」
首を傾げるミュラーの視線の先で、オーベルシュタインがしれっ

と上官に事態の認可を求めている。
それに対するラインハルトの反応は、酷く上機嫌なものだった。
彼は、最近の会議にちょっとマンネリを感じていたのだ。
「卿の判断に任せる。とこでリヒター少佐と言ったな。何処の所属だ？」
話の成り行きに少々面食らっていたものの、ミッターマイヤーは五日前からキルヒアイスの副官の一人として勤務している事を明言した。
キルヒアイスの配下と聞いて少し驚いたようだが、事態を面白くしてくれたこの新顔の士官に、ラインハルトは笑顔でこう言った。
「少々行き過ぎではあるが、貴官の正義感は良く判った。これからも任務に精勤してもらいたい」
その言葉に、ミッターマイヤーは敬礼して会議室から退室した。
……だから、その時ロイエンタールの片頬に浮かんだ、侮蔑とも憎悪とも付かない表情には気が付かなかった。

3．深まる混迷

帝国暦四八八年、宇宙暦七九七年、四月。
同盟でクーデターが続発する中、帝国内でもリヒテンラーデ・ローエングラム枢軸と、ブラウンシュヴァイク、リッテンハイムの二巨頭が率いる大貴族連合との戦いが間近に迫っていた。
そんな中、ジークフリード・キルヒアイス上級大将は、アウグスト・ザムエル・ワーレン、コルネリアス・ルッツの両中将と共に辺境星域の平定に向かう事となった。
だが、ほんの数日前にキルヒアイスの幕下に入ったカール・リヒター少佐ことウォルフガング・ミッターマイヤーとフォン・ウェーバー曹長ことガウェイン・クラスターの二人は、ローエングラム候付きの武官とその従卒として『ブリュンヒルド』に乗り込む事となった。
ガウェインの同行は、ミッターマイヤーの望みだったが、この急な配置換えは退屈を嫌ったラインハルトの命令であった。
急な配属転換に、慌しく荷物を纏めて『バルバロッサ』から『ブリュンヒルド』に移った二人は、取り敢えず着任の挨拶の為、ラインハルトの私室に向かった。
「なんか、嫌なんですよねえ」
ミッターマイヤーに付いて歩きながら、周囲に聴こえないよう、小声でガウェインがぼやく。
彼には、なんだか見世物にされているような感覚がするのだ。
ミッターマイヤーの方は、実はこの時軽く落ち込んでいる最中であった。
本来ならキルヒアイス艦隊に所属している筈の『部下』であり、士官学校の同期生であるホルスト・ジンツァーが、キルヒアイス艦隊発足の僅か二ヶ月前に、所属していた輸送艦隊で発生した事故で死亡している事を掴んだ為である。

もし、彼がいれば自分が『ウォルフガング・ミッターマイヤー』である事は一発で看破されるであろうが、その代わりずっと力強い協力者になってくれただろう。
そう思うと、ミッターマイヤーは『この世界』と言う物に言い知れぬ恐れと怒りを感じていた。

着任の挨拶の際、ミッターマイヤーと（何ゆえか着衣を直しながら）元帥居室から出て来たロイエンタールが鉢合わせ、騒いでいるのをオーベルシュタインがその場にあった人工大理石の像でしばき倒したと言う、「慮外者事件」があったものの、ミュラーがいなかった為に関係者だけの秘密と成っている。
その別れ際、ミッターマイヤーはオーベルシュタインに礼を言った。
立場上、そして状況上もその方が良いと思ったのだ。それに対して、オーベルシュタインは気にする必要は無いと言った。
「職務上、必要と思われた事をしたまでだ。だが、貴官ももう少し注意した方が良かろう」
そう言って立ち去ったオーベルシュタインを見送って、暫くしてからガウェインがこう切り出した。
「オーベルシュタイン卿って、意外とシャイな人なんですね」
「シャイ？　オーベルシュタインが？」
聞き返したミッターマイヤーに、頬を掻きながらガウェインは笑った。
「だって、あの背中は恥ずかしそうでしたよ？　あの方、口下手なんで損してるタイプじゃないかなあ」
そう言われて、ミッターマイヤーはふと昔を思い返してみた。
よくよく考えてみると、ミッターマイヤーとオーベルシュタインにはこれと言った親交が無かった。
ミッターマイヤー自身、軍議で意見を戦わせる以外には、特に彼

と話した記憶は無かった。
やがて元帥位に就いてからも、自分は初代宇宙艦隊司令官、相手は初代軍務尚書として、一定の距離を保った付き合いしかなかった。
今にして思えば、オーベルシュタインの部下で不当な扱いを受けたと言う話は聞かなかった。
寧ろ、「能吏としての全力を要求されて辛い」と、言う話ばかりでは無かったろうか。
ここまで考えて、ミッターマイヤーは自分が存外、偏狭な考えで人に接していた事に思い至り頬を赤らめた。
「公正明大が聞いて呆れるな……」
小さくそれだけ呟くと、ミッターマイヤーは歩き出した。

大貴族連合とローエングラム軍の戦いは、帝国暦四八八年四月十九日、ミッターマイヤーの代わりにウルリッヒ・ケスラーがシュターデンを迎え撃つ形で始まった。
戦いに先立ち、ミッターマイヤーはケスラーの側で、ガウェイン相手に戦術論を披露した。
即ち、理屈倒れの人間に情報を故意に流して困惑させ、そして敵を各個撃破に持ち込む ―― そう、彼が『あの時』使った戦術を話したのだ。三次元チェス盤上で、その様子を駒で並べてそう語ったミッターマイヤーに、ガウェインが頬を掻きつつ唸る。
「うーん、そこまで上手く行きますか？ 俺なら、機雷越しにレールキャノン撃ち込んで、相手を牽制している間に別働隊を迂回させて、後ろから襲わせた方が良いと思うけど」
「その為に、幾つか情報を流すんだよ。特に、事実と理論が対立する時、理論に走ってしまう頭でっかちにはね。そしてその下が、高機動訓練も出来ていないのに突っ走るような無能なら、主砲の斉射で事が済む」
緋色の髪を掻き混ぜながらの言葉に、濡れ羽色の頭が大きく上下

に動いた。
「なるほど、纏まって移動するって意識が無い相手なら、薄く延びた状態になりますよねぇ」
二人の会話と、シュターデンの人となりを聴いたケスラーは、見事に相手の欠陥を付き、敵艦隊の三分の二を撃ち減らしてレンテンブルグ要塞へと追い込んだ。
しかし、そこにはやはり、オフレッサー上級大将が待ち受けていた。

レンテンブルグ要塞を陥落させるべく、エネルギー炉への最短ルートである第六通路から侵入しようとしたローエングラム軍の装甲擲弾兵部隊は、装甲擲弾兵総監オフレッサーとその部下の前に、無残な屍を晒す事となった。
指揮を任されたロイエンタールの元に、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトがやって来たのは第二隊が半数以上討ち減らされた頃だった。
「うげげっ、オフレッサーかよ。あんでこんな所に居やがんだ、あの化け物」
歯に衣着せる気のさらさら無い発言に、ロイエンタールは眉一つ動かさずにぼそりと言った。
「さてな。取り敢えず資材が届くまでは、あそこであの化け物に玩具を宛がい続けるしかない」
「玩具って、おい。何やる気だ、お前？」
画面から、げらげらとラインハルトを罵倒する原始人に青筋を切りつつ、だが同期の不吉な物言いに不安を覚え、ビッテンフェルトは聞き返す。
「今、工作船に艦船ドッキング用のチューブを用意させている。それを第六通路に突っ込んで、そのままエネルギー炉まで直通させる」
「……そりゃ、手っ取り早かろうが、だか設置する時オフレッサー

の奴をどうするんだ？　下手したら、奴が邪魔して設置出来ねぇんじゃねえか？　あいつ、薬物使ってるようだからな、何やるか判らねぇぞ？」
　それに、答え様としたその時だった。
「ロイエンタール閣下、オーベルシュタイン参謀長より通信です」
「オーベルシュタインから？」
　部下の声に、金銀妖瞳を細めて繋ぐように命じる。通信用画面に現れたオーベルシュタインは、淡々と命令を伝えて来た。
『ロイエンタール提督、現在継続中の作戦を中断し、オフレッサーを生かしたまま捕らえよとの事だ』
「随分な事を命じてくれる。あのような人間挽肉製造機を生け捕りだと？　作戦があるなら提示して貰いたいものだ」
　鼻で笑ったロイエンタールに向かって、心なしか眉を上げてオーベルシュタインはこう切り替えした。
『作戦ならば、現在準備している者がいる。卿にもその手伝いをして貰いたいものだ』
　その言葉が終るか否かに、ビッテンフェルトの頓狂な声が上がった。
「ありゃ、あの装甲服の奴、えらく小柄だな」
　その次の瞬間、ロイエンタールの姿は、作戦指揮室から消え失せていた。

「ガウェイン、状況は？」
　久方振りの装甲服に、軽く眉を顰めながらミッターマイヤーは囁いた。
『後三十分下さい、ここの岩盤、どうも後から補強したみたいで、見取り図より厚いんです』
「判った、何とか時間は稼ぐ。大急ぎで頼むぞ」
　外壁側で作業するガウェインとの通話を切ると、トマホークを掴

んで要塞内に踏み込んだ。
正直、ミッターマイヤーは片手、片足を失う事を覚悟してそこに立っていた。
あの時は、ロイエンタールが居た。
だが今は、己一人でオフレッサーに挑もうとしていた。
攻略に手間取っていると聞いた時、脳裏に浮かんだのは嘲笑するオフレッサーと、奴に虫けらのように殺された部下達の姿だった。
そして、奴を捕らえたと同時に敵の反撃が止まったのを思い出して、ミッターマイヤーはフェルナーに攻略作戦を持ち込んだのだ。
フェルナーからオーベルシュタインに話が行けば、恐らく通るだろうとミッターマイヤーは踏んでいた。
そして、その予想通り作戦は許可された。

屍山血河を越えると、そこに地獄の主よろしくオフレッサー装甲擲弾兵総監が待っていた。
『うーん？　何者だ、貴様は』
あからさまに馬鹿にした声に、追従する様に部下達がげらげらと笑った。
怯える他の兵士達の前に立って、ミッターマイヤーはトマホークを構えた。
「吼えるな、原始人。主人の元で骨でも貰っていれば良いのに、こんな所に巣を作るなよ」
『黙れ、少佐風情がっ！！』
唸りを上げて襲い掛かるトマホークを紙一重で交わし、ミッターマイヤーはオフレッサーの足元を狙う。
それを飛び上がるようにして避けた化け物は、通り抜けつつミッターマイヤーの頭を、通路の壁と拳で挟み込んで叩き潰そうとする。
それを柔軟性で交わすと、ミッターマイヤーは敵と距離を取った。
『ほう、少しは楽しませてくれる様だな。では、もう少し付き合っ

て貰おうか？』
顔の傷跡もあって、ぞっとするような笑顔でオフレッサーはにじり寄る。
だが、そこに風のように走って来た一つの影が、オフレッサーに向かってトマホークを投げ付けた。そのタイミングに、ミッターマイヤーも自然に動いて態勢を変える。
『貴様っ！　ロイエンタールかっ！！』
『やかましいっ！』
オフレッサーがトマホークを避けて態勢を崩したところに、ミッターマイヤーとロイエンタールによるコンビネーションアタックが始まった。
言葉を掛け合う訳ではない。
だが、幾度となく繰り返した幾つもの戦いの呼吸が、二人を至強へと駆け上がらせた。
攻守入れ替えて戦う二人に、オフレッサーがついに焦れて大きくトマホークを振り上げた、その時だった。
『少佐、下がってください！』
ガウェインからの通信に、小柄な身体はロイエンタールの長身を抱えて後方に飛んだ。
それを追おうとした巨体が、不意に小さくなった。
通路に穿たれた穴　―――　岩盤を除去し、通路の床材の結合を薬品で緩めて作った落とし穴に、オフレッサーは落ち込んだのだ。
『なるほど、原始人にはお似合いだ』
オフレッサーの手からトマホークを跳ね飛ばすと、ロイエンタールは自軍の装甲擲弾兵に突撃を命じた。
目の前で、オフレッサーが敵に捕らえられたのを見た敵側の兵士達は、薬の効果が切れたよりも酷く憔悴して、要塞奥へと逃げ出した。
そして程無く、レンテンブルグ要塞は陥落した。

『ブリュンヒルド』に戻ると、ミッターマイヤーは人目から逃れるようにロッカールームに入った。
そこには、一足先に戻っていたガウェインが待っていた。
「オフレッサー上級大将は、もうすぐガイエスブルグに帰されるそうですよ。どうも、スパイの濡れ衣を着せて、向こうに不協和音を起こさせるつもりのようですね」
「どうして、そう思うのかい？」
痛みを含んだミッターマイヤーの問いに、ガウェインは「私見ですけど」と前置きしてこう応えた。
「流言飛語は、兵法の初歩ですからね。特に、貴族軍はローエングラム候憎しで集まっただけの集団で、確たる指揮官が居る訳じゃない。盟主と言っても、ブラウンシュヴァイク公に心酔している訳でもないし、総指揮官のメルカッツ提督も『依頼』されているだけでしょう？　そこに反ローエングラム候の急先鋒と言われたあのオフレッサー上級大将が無傷で帰って来たら、普通裏取引したと考えるんじゃありませんか？」
「敬服するよ、ガウェイン。でも、余り子供にそんな事、判って欲しくは無いよ、私は」
アンダー・ウェアを脱ぎ掛けて、振り返ったミッターマイヤーの胸元にガウェインの目が吸い寄せられる。
「少佐、胸にそんな痣、何時作ったんですか？」
言われて、ミッターマイヤーも目を落とす。
胸元、ちょうど心臓のすぐ側か上辺りに、直径三センチほどの丸い痣が浮いている。
赤黒いその痣を軽く押さえて、ミッターマイヤーは青っぽい緑色の目を細める。
「痛くは、無い。何だろう、今までは無かったと思ったけど」
「取り敢えず、医務室に行って置きますか？」
そう言いながら先にロッカールームから出ようとしたガウェイン

を、何かが押し退けた。
無論、艦内を探し回ってここを突き止めたロイエンタールである。
「ここに居たのか、ミッターマイヤー！」
言うなり、己を掻き抱く金銀妖瞳の美丈夫を前に、ミッターマイヤーはもう言葉も無い。
壁に叩きつけられ、強かに額をぶつけたガウェインの方が、携帯端末に向かって冷静に話し掛けていた。
無論、通信先はアントン・フェルナーである。
「すみません、又出ました」
『了解、すぐ行くから』
その後、どんな騒ぎになったかは言うまでも無い。

二時間後。
食堂の一角で、むっつりと黙り込むロイエンタールの元に、食事を抱えてビッテンフェルトが寄って来た。
「よう、又リヒター少佐に茶々出して、セクハラだってオーベルシュタインに怒られたんだってな」
命知らずな黒色槍騎兵艦隊の親玉を、青と黒の目がぎろりと睨む。
「あれはミッターマイヤーだ。どんな方法かは知らんが、生きていたミッターマイヤーだ」
親友とのスキンシップを阻害され、ぎりぎりと煮詰まるロイエンタールに軽く嘆息すると、ビッテンフェルトは口を開いた。
「あのな、上級士官が、下位の士官にセクハラするのは軍規違反だ、それは判ってるか？」
「それが何か？」
自分と親友に何故それを問う。
そう考えているらしいロイエンタールに向かって、らしからぬ忍耐の下ビッテンフェルトは言葉を続ける。彼とて、あの緋色の髪の佐官を好ましく思っているのだ。

「あのな、だから一万歩譲って奴がミッターマイヤーだとしても、お前のやってる事はセクハラだ」
「何故っ！」
「だって、ミッターマイヤーは少将だが、お前は大将だ。お前の方が上官だぞ？」
その言葉に、ロイエンタールは面妖な事を聞いたと目を丸くした。
だが、暫くするうちに腕を組み、真剣に悩み始めた。
「そうか。ミッターマイヤーは真面目だからな、それで嫌がっていたのか」
「……駄目だ、こりゃ」
かつての学年首席のていたらくに、ビッテンフェルトの嘆息は深かった。

時間は容赦無く流れ、運命の時が刻一刻と近付いているのを、ミッターマイヤーだけが知っていた。

3．深まる混迷（後書き）

２話と３話の中身は、内容を若干カットしています。
カットされた理由は「腐女子向け」だったので。

自サイト掲載版を読んでいた人から、「大した事ないが注意した方が良い」と言って頂いたので、手直しして見ましたが如何でしょう。

4. 間奏曲

『救国軍事会議』による、ハイネセン占拠が続く中、ハイネセン記念スタジアムで行われていた市民集会に軍人達が踏み込んだ。

問題は、その指揮を取っていたクリスチアン大佐と言う男が所謂狂的な軍隊至上主義の男で、

『力ある者こそ正義、力もないのに口ばかりの市民は殺されても当然』

等と言う、人間として下の下、ついでに言うなら自分がする事は全て肯定されると信じる救い難い種類の人間だった。

その男に、主催者であるジェシカ・エドワーズ議員は叫んでいた。

「貴方はルドルフの不肖の弟子よ、それを自覚なさいっ！　そしている資格のない場所から出てお行きなさいッ！！」

その言葉に、男の顔がどす黒く染まった。

「この女っ！」

拳銃を握ったままの手で、クリスチアンはエドワーズ議員を殴り付けようとした、その時だった。

四方八方から、クリスチアンに銃口が向けられ、銃を叩き落された大男は、やはり四方から殴られ無様に床に転がった。

市民の中から飛び出した十数名の女性達が、手にした銃や特殊警棒で殴り伏せたのである。

「貴方の言葉が、同盟軍の総意だと思われるのは不愉快だわ」

そう言ったのは、黒髪を後ろで纏めた妙齢の美女だった。

その手には、同盟軍の制式拳銃が握られている。

ざわつく市民、並びに鎮圧部隊の兵士に向かって、金髪を肩口でそろえた知的な美少女と怜悧な眼差しの美女とが、やはり拳銃片手に叫んだ。

「私達は、ヤン・ウェンリーを支持している同盟軍兵士です！」

「いいかい、大佐の身の安全を確保したいなら全員銃火器の安全装（セーフティ）

置を掛けるんだ！」
　その声に顔を見合わせた兵士達に向かって、長身でサングラスを掛けた女兵士が叱責する。
「早くしなっ！　屑でも死んだら、あんた達も泥被るんだよっ！」
　そこまで言われて、やっと兵士達はおたおたと銃を引っ込めた。
　それを見届けると、女性士官（ウエーブ）のリーダー格らしい髪を纏めた女性が議員に向き直り敬礼した。
「エドワーズ議員。これ以上は危険です。『救国軍事会議』の上層部が、これ以上の圧力を掛ける前に、市民の皆さんをスタジアムから散会させるようお願いします」
「しかし」
　何事かを言い掛けたエドワーズ議員に向かって、女性士官は胸に手を当てこう続けた。
「軍人が全て、『救国軍事会議』のお題目を受け入れている訳ではありませんわ。何より、ヤン・ウェンリーこそを支持する者もいますのよ。……私達のように」
　その時だった。
　隙ありと見て、クリスチアンは床から跳ね起き、自分に背を向ける馬鹿な女士官へと突進しようとした。
　だが、その目の前に、ふわりと赤いものが舞い降りた。
「艦長に、何するアルか！」
　その言葉が耳に届いたかどうか。
　飛び込んで来た赤いチャイナドレスの少女によって、クリスチアンは顎を砕かれ、そのまま卒倒したのである。

　戦況は、ローエングラム軍有利に進んでいた。
　辺境の平定を命じられたジークフリード・キルヒアイスは、大貴族連合に反旗を翻す辺境伯達を取り込み、着実に貴族達の領地を制圧して行った。

だが、その情報を聞きつつ、カール・リヒターことウォルフガング・ミッターマイヤーは徐々に塞ぎ込む事が多くなった。
「リヒター少佐、こちらですか？　……どうか、なされましたか？」
食堂から、鼻唄を歌いながら自室に戻って来た、フォン・ウェーバー曹長ことガウェイン・クラスターに肩を揺すられて、はたとミッターマイヤーは我に返った。
「あ？　ああ、ごめん、何でも無いよ。それより、何かあったのかい？」
「さっき、食堂でフェザーン経由の新聞見てきました。同盟で叛乱が起こっています。それも、同時に四箇所で。尤も、四月頭の情報ですから、多分もう鎮圧されたとは思いますが」
そう言いながらも、ガウェインの表情は固い。
ミッターマイヤーも、その意味は良く判っていた。
恐らく、その四つはあっと言う間に鎮圧される筈である。
そしてその後、きっと大きな事件がハイネセン・ポリスで起こる筈である。
そうでなければ、ラインハルト・フォン・ローエングラムは落ち着いて貴族どもの相手が出来ないであろうから。
そしてもう一つ、これはずっと彼の心を占めている事態が近付きつつあった。
貴族達の肥大した自我が呼び起こす、ラインハルト達が決して見逃してはならない事態が。

暦は、早や七月に入っていた。
キルヒアイス艦隊が、キフォイザー星域にあるガルミッシュ要塞でリッテンハイム候を破ったと言う知らせが入り、ローエングラム陣営は大いに気勢を上げていた。
だが、その中にあって、ミッターマイヤーは一人何かに怯えていた。

無論、人前ではそんな素振りは見せない。
だが、従卒として寝起きを共にするガウェインだけは、自室内で考え込むミッターマイヤーを見る事となった。
故に、ガウェインは思い切って彼に問い掛ける事にした。……何に、そこまで苦しんでいるのかと。
「少佐、いやミッターマイヤー少将、コーヒー飲まれますか？」
「え？　あ、うん、貰うよ。でもガウェイン、そっちの名前は」
「大丈夫ですよ、ちゃんとロックしてるし、盗聴器のチェックもしてます」
そう言って、ガウェインは食堂で貰って来たミルクと角砂糖を添えて、琺瑯（ほうろう）のマグカップを載せたトレイを差し出した。
それを受け取りつつ、ミッターマイヤーは笑顔を作る。
「すまないね」
「いいえ。ところで、何か気懸かりがあるんじゃないですか？」
小細工抜きで、直球を投げて来たガウェインにミッターマイヤーは押し黙る。
その様子に、ガウェインは表情を引き締める。
「何かあるんじゃないんですか？　これから先。帝国侵攻の時の様に、何か気懸かりがあるんじゃないんですか？」
目を下に向けたミッターマイヤーに向かって、ガウェインは必死に言葉を続けた。
「俺じゃあ、何も出来ませんけど、でも聞き役くらいは出来ます、一人で抱えるよりマシですよ？」
そう言い募りながら、懸命に自分の顔を覗き込むガウェインの顔を見上げて、ふとミッターマイヤーは、その顔に見覚えがあるような気がした。
『俺に任せてくれないか？』
そう言った声が聞こえた気がして、ミッターマイヤーは青く染めた瞳を瞬いた。
「そう、だな。聞いてくれるか、ガウェイン」

そう言って、ミッターマイヤーは話し始めた。
これから行われるだろう、貴族による惑星ヴェスターラントへの核攻撃、そして、ローエングラム候がしてしまう事。
「閣下は、大貴族達の非人道性を喧伝する為に、……《ヴェスターラント》を見捨てる事になる」
「待ってください、そりゃあ、やらかした方はそれで確かに外道の烙印を押される事になりますよ。でも、それじゃあローエングラム候の方も『所詮貴族』って謗られませんか？」
「でも、戦いは、早く終る」
その言葉に、ガウェインは首を横に振った。
「違いますね。それは、『逃げる為』に自分の後方部隊を攻撃したリッテンハイム候と、どう違うと言うんです？　ローエングラム候がやろうとしている事は、『テロリスト』に口実を与えただけです。どうするんです？　テロリストを撲滅する為に、今度はローエングラム候が無辜の人民に向かって、核攻撃する事になりますよ？！」
「……判ってる。判ってるんだ、だから、それを阻止したいんだ」
そう言って、再び顔を伏せたミッターマイヤーに向かって、何かを思い付いた様にガウェインは新しい質問をした。
「ミッターマイヤー少将、もしかして貴方、この先何が起こるか、総て知っているんじゃあ無いですか？」
その言葉に弾かれるように顔を上げ、真っ直ぐ見返す年下の少年の顔をまじまじと見返したミッターマイヤーは、自分の秘密を口にした。
即ち、自分と妻子が、二年前にその時点で五年後の世界から、フェザーン商船の中にタイムスリップしたらしい事を。
「信じられないだろう？」
「……そうですか、ミッターマイヤー少将も」
てっきり、胡散臭がられると思っていたミッターマイヤーは、ガウェインの反応に目を瞬かせた。頬を掻き掻き、ガウェインはこう告げた。

「少将、俺、何歳だと思います？」
「確か、十六歳、だったよね」
それにガウェインは首を振った。
彼は、二歳の時に事故に合い、その事故で父親と生き別れ、そして母親と共に五年前の世界に現れていた。
結果として、戸籍の無い私生児となってしまった彼を抱え、母親は当時在籍していた大学の研究室から追われる事になった。
「どうも、そんな人間は少なくないらしいんです。ほら、臨時旗艦の『バージニア・ウルフ』のマリー艦長。あの人も同じように、タイムスリップの経験者なんです」
ガウェインの言葉に頷き返しながら、ミッターマイヤーは指を組み額に当てていた。
あの時、夜空が白く光った。
今にして思えば、あれは墜落してきたシャトルか何かだった気がする。
そうすると自分と妻、そして息子は、元の世界（あそこ）では死んでいるのかもしれない。
では、今ここにいる自分は、一体何者なのだろう？
そう、ここでも『ウォルフガング・ミッターマイヤー』と言う男は、死んでいるらしいと言うのに！
だが、その疑問はガウェインが溶かした。
「俺、今生きているのは、必要とされる時があるからだろうと思ってます。俺がいなければいけない、そんな瞬間の為にあの大事故を生き延びた、時間を飛び越えなきゃいけなかったんだって、そう思っています」
「必要だから？」
「ええ」
「俺が、いなくてはならない？」
「ええ、だってそんな不思議な事、意味なく起きたなんて思えないじゃないですか？」

ミッターマイヤーは、ガウェインの細い身体に縋り付いた。
そのまま、声無くすすり泣き始めた身体をそっと抱き締め、ガウェインは菩薩像の様に微笑(わら)った。
「頑張りましょう、俺達。きっと、ここに来なくちゃいけない理由があったんですよ。もしかしたら、その惨事を止めるのも、理由の一つかもしれませんよ？」
赤く染めた頭が、微かに揺れた。
そのまま休憩が終るまで、ガウェインはミッターマイヤーを抱き抱え続けた。

同刻、ハイネセン・ポリスのとある場所。
そこに、三人の人物が詰め込まれている。
一人は、白髪の貫禄ある老人。もう一人は、中央アジアを席巻した騎馬民族の末裔と言われる大柄な人物。そして今一人は、紳士然とした髭の人物だ。
彼らこそは、同盟軍の反骨トリオ、ビュコックとウランフ、ボロディンの三大将である。
三人とも、『救国軍事会議』に対して否を唱え、ここに放り込まれている。
一応、バストイレ付きで食事も一日二食ながら配給されているので、死ぬ心配は無かった。
扉に耳をつけていた両提督が、人の悪い笑顔と共に戻って来る。
「どうやら、第十一艦隊はヤンの奴に撃破されたようですな」
ボロディンがそう言うと、ウランフの方はやれやれと首を振った。
「そりゃ駄目だろ、ルグランジュでは力不足だ。なんてったって、奴はテキスト通りに敵が動くと思い込んでる」
「まあ、仕方が無いね、彼はグリーンヒルのお気にの一人だ。一応、戦況は判る癖に、教え子可愛いで暴走するのが奴だから」

肩を竦め合うと、まずビュコックが嘆息した。
「あの嬢ちゃん、なんと言ったかね」
「ああ、代議士のジェシカなんたら」
ウランフがそう言うと、ボロディンも小さく頷いた。
「無茶をする。幾ら何でも、この状況で市民集会を行うなんて。クーデター反対派の女性士官達が助けたらしいが、それでも懲りずに集会の計画を立てているそうだよ」
「ああ、クリスチアンのゴリラが、顎砕かれて戻って来たって言う、あれな。まあ、いいんじゃないか、奴にもいい薬だろう」
軍人ではあるものの、その事を特権と勘違いしているあの手の馬鹿が大っ嫌いなウランフは鼻で笑う。
それには一切触れずに、ボロディンは水の入ったプラスチックのコップを持ち上げた。
「まあ、なんだね。第十一艦隊が潰された以上、状況はどんどんクーデター派の連中に不利になるね」
「ほほう、やはり不利かね？」
ビュコックが聞き返すと、両提督は当然と肩を竦め合った。
「そりゃあ、今まで日和っていた連中が、雪崩れを打ってヤンの方に加担するでしょうし」
「外の様子じゃ、規制規制で市民に不満も溜まっている。奴らには、自分達があくまでも少数派だと言う、発想は無いようですからな」
手を振りながらのウランフの言葉に、「だが」とビュコックは唸る。
「問題は、その少数が首都星に立て篭もっていると言う事実だ。しかも、首都防衛なぞと称して設置した、『アルテミスの首飾り』がある」
「ああ、あれか」
「実際、あれは邪魔くさい」
頷き合うと、殊更声を大きくしてウランフは溜め息を付いた。
「まあ、設置した当時は無敵だったろうが、帝国じゃあ『指向性ゼ

ッフル粒子』何ぞと言う物が出来ているからな。今じゃ余り意味は無いんじゃないか、あれは」
「何、要は衛星を一箇所に集めてしまえば、やりようはあるだろう。ちょっと物を考えられる奴がいれば、幾らでもどうとでも出来ますからな」
そう言いつつ、三人は耳を澄ました。
すると扉の向こうで、走って行く音がする。彼らの会話に耳を欹(そばだ)てていた者が、どうやら幹部に注進に向かったらしい。
その足音を聞きつつ、三人はにやりと笑った。
無論、三人は『聞かせる為』に、殊更声高に喋っていたのだ。
こうして、三人によるゲリラ活動は、ヤン・ウェンリーがハイネセンを制圧するまで続けられたのである。

5．ヴェスターラントの攻防

戦役は四ヶ月目を迎えた。

『禿鷲の城』（ガイエスブルク）要塞に辿り着いた小型艦が、影を呼んだ。

それは、領民に襲撃され、瀕死の状態で辿り着いたシャイド男爵を運ぶ船であった。

甥の死に逆上したブラウンシュヴァイクは、領地である惑星《ヴェスターラント》への核攻撃を命じた。

哨戒中のミュラー艦隊が、貴族側の哨戒艇を捕らえたのは、それから六時間後の事である。

それに乗っていた若い兵士は、艦隊の人間に向かって泣きながら叫んだ。

「盟主が、惑星（ヴェスターラント）を死の星にすると言って……」

二十歳くらいの投降者は、急を聞いて走って来たナイトハルト・ミュラーに取り縋って叫んだ。

「助けてください、《ヴェスターラント》は故郷なんだ、家族がいるんだ！　助けてください、助けて……」

兵士を別室で保護すると、ミュラーは直ちに総旗艦ブリュンヒルドに向かった。この時点で、彼は事態を説明した後、そのまま己が艦隊を率いてヴェスターラントに向かうつもりでいたし、それを見越して参謀長に艦隊の準備を命じていた。

ところがだった。ミュラーの報告に、すぐ救援を派遣させようとしたラインハルトに向かって、オーベルシュタインはこう言った。

「いっそ、血迷ったブラウンシュヴァイク公に、この残虐な攻撃を実行させるべきです」

そして、そのままその有り様を帝国全土に喧伝する事で、貴族達

から民衆や平民出身の兵士達を離反させようと言うのであった。
「彼らに、宇宙を統治する権利は無いと宣伝できれば、少ない犠牲でより多くの民を救う事が出来ます」
オーベルシュタインの言葉は、ミュラーにはとても肯定出来るものではなかった。だが、その言葉より更に信じられない発言が、彼の目の前に座る司令官から出た。
「判った、卿に任せよう」
それは、大した逡巡も無くラインハルトの口から出た。
ラインハルトはこの二年余り、ロイエンタールからある種の毒を盛られていた。それは肉体を侵すものではなく、ある意味統治者としての気構えが欠けている彼に対する、『洗脳』と言うものであった。

あの日、大貴族によって拘留されたミッターマイヤーを助けようとした時の事だ。
何とか駈け付けた三人は、フレーゲル達貴族の若者によって足の腱を切られ、ずたぼろに痛め付けられていたミッターマイヤーを助け出した。
だが、外に出ようとしたその瞬間やけくそで撃って来た貴族の銃弾から、ミッターマイヤーはロイエンタールら三人を庇って死んだ。アンスバッハが辿り付くのが遅れたが故の、悲劇だった。
しかも、そのすぐ後にミッターマイヤーの妻が、警備に詰めていた士官と共に事故として焼き殺されたと知らされたのだ。
問題は、この時点でラインハルトにとってウォルフガング・ミッターマイヤーと言う人間は、残念ながら死んだ人間であり、有能だったらしいがそれだけの存在だった。寧ろ、この死によって自分達を頼って来た、オスカー・フォン・ロイエンタールを完全に陣営に引き込む事が出来ると言う、打算が働いたのだ。
無論、それだけでは無かったのだが、この時親友を失い己が無力

に打ちひしがれていたロイエンタールには、それだけで充分ラインハルト（かれ）に憎悪を抱くに足る状況だったのだ。
冷たくなった、むごい拷問でぼろぼろの友の遺体を抱き上げ、ロイエンタールは誓ったのだ。
そう、貴族が蔓延（はびこ）る帝国も、そしてラインハルトが支配するだろう宇宙もろとも、全てを滅ぼそうと。　――　それしか、己が死に至る方法を思い付けなかったのだ。

近年、ジークフリード・キルヒアイスとラインハルトの間が微妙にギクシャクしているのも、ロイエンタールの策謀の結果である。
元々、『姉を取り返す為』と言う極々感情的なところから行動を起こしたラインハルトに、『己の欲求に耐える』と言う志向は薄い。それを彼に思い出させるのが、キルヒアイスと言う存在であり、それ故彼らが互いを己自身と取るのは正しい。
ロイエンタールはその二人の間に、ラインハルト自身の好奇心によって楔を打ち込み、そしてその隙間を『自己正当化』と言う欺瞞で押し広げつつあるのだ。そしてその結果として、今ラインハルトは『覇者の冷酷』と銘打った非道に踏み込みつつあった。

己の発言が、年の近い部下にどれほどの衝撃と不信を与えたのか、全く気付く事無くラインハルトは全軍に緘口令を敷く事を命じた。
暫く上官と、その横に沈黙と共に立ち尽くす総参謀長とに目を走らせ、ミュラーは黙って頭を下げる事しか出来なかった。

ミッターマイヤーとガウェインが、書類を運んでいたちょうどその目の前へ、退出して来たミュラーが鉢合わせる事となった。
「わっ」
「あ」

「わわっ、ごめんなさいっ」
崩しそうになった書類の山を、何とか抱え直したガウェインは、さえない顔色のミュラーに軽く眉根を寄せた。
「ミュラー提督、どうかなさいましたか？」
「ん……いや、何でも無いんだ。じゃあ」
歯切れ悪くそう言って、ミュラーは二人に背を向けた。
「ミュラー提督、何かあったみたいですね。酷くしょげてらっしゃいますよ？」
ガウェインの言葉に、ミッターマイヤーの手からファイルの束が落ちた。
「始まるんだ」
「え？」
掠れた呟きにガウェインが振り返ると、ミッターマイヤーは荷物を総て投げ出し走り出していた。

（始まってしまうっ！　助けなくては、あの悲劇が繰り返されてしまうっ！！）
息せき切ってミッターマイヤーが飛び込んだのは、超空間通信室の一つだった。
扉をロックして、機材に飛び付いたミッターマイヤーは懸命に記憶を手繰り、この時期に使っていたコールナンバーを記憶の底から引っ張り上げた。
その頃、ロイエンタール艦隊は要塞包囲の一角をなしていた。尤も彼からすれば、退屈この上ない時間でしかなかった。
そこに、副官のレッケンドルフが眉根を顰めつつ寄って来た。
「閣下、閣下の個人回線に通信が入っておりますが」
「何だと！？」
コールナンバーを見て、ロイエンタールは私室に回す様に命じて

一目散に走り出した。
それは、この世でただ一人にしか教えなかった、完全に個人用（プライベート）のナンバーだったのだ。
息せき切って自室に戻ると、不安と困惑と希望をごたまぜに回線を繋ぐ。だが、画面は鈍色のまま、懐かしい声が救いを求めて来た。
『ロイエンタール！　お願いだ、《ヴェスターラント》を助けてくれっ！』
「ミッターマイヤー！　お前なのか！？」
呼び掛けに一瞬言い淀んだものの、相手は振り切るように言葉を続ける。
『お願いだ、《ヴェスターラント》の人達を助けてくれ、あの人達を死なせないでくれ！　お前は、俺の望みを叶えてくれるだろう？』
「判った、必ず助ける」
作戦行動もへったくれも無かった。ただ『ミッターマイヤーが自分に助けを求めている』、その事がロイエンタールの凍り付いた感情に火を点けた。
「だから、俺の元に戻ってくるだろう、ミッターマイヤー」
『……判った』
掠れた、でもはっきりと聞き取れる声が、ロイエンタールには総てだった。
通信が切れると同時に、ロイエンタールは艦隊に出撃を命じた。
すぐ側にいるケンプとビッテンフェルトに穴を塞ぐように言い捨てると、かつての親友もかくやの速度で、ロイエンタールは《ヴェスターラント》へとひた走ったのである。

領主を追い出した《ヴェスターラント》の住民は、その時ちょうどこれからの事を決めようと集会を行っていた。母親に連れられて、そこに来ていた子供が、空を見て歓声を上げた。

「わあ、母さん、あれ何？」
「え？」
次々に歓声を上げる子供達に吊られて、大人達も空を仰ぎ、空に無数に翻る光のカーテンを見出した。極点でしかありえない、オーロラの乱舞に驚いた次の瞬間、周囲の電子機器が次々とブラックアウトを起こした。
事態を掴めぬまま騒然となった人々に向かって、一人の若い男が走って来て叫んだ。その手には、片手に収まる程度の機械が握られている。
「皆っ！　早く地下倉庫へっ！！」
学校の理科の教師であるその男は、息せき切って叫んだ。
「上で熱核兵器が使われている！　早くっ！！」
領主の屋敷を襲撃した際の分配品として、幾つかの機械を手に入れていた男の叫びに、兵役経験のある老人達が蒼褪めた。
「領主の報復だ！」
「子供と妊婦を先に！　早くっ！！」
走り出す人々の背に、医者が声を張り上げる。
「子供にヨードチンキを飲ませるんだ！　毒から内臓を守ってくれるっ！」
家族で、集団で逃げ込む彼らの背後で、出し抜けに空が暗くなり、暫くして地鳴りのような振動と音が町を揺すった。
悲鳴が上がる中、計器を見ていた教師が、皆を落ち着かせるように声を張り上げた。
「大丈夫だ、遠い。ここには大した被害は出ない」
砂漠に落ちて、砂が舞い上がったからこそ暗くなったのだろう。これが直撃、または至近距離だったらと思うとぞっとする。
じきに降り出すだろう雨が問題だが、原子分解の光を浴びずに済んだ事に、教師はほっとしていた。
その声に後押しされて、人々はそれぞれ穀物貯蔵用の地下室へと逃げ込んだ。

人々が地下に潜み、そしてそれからどれだけ経った頃だろう。
「ねえ、何か聴こえるよ？」
「しっ」
子供の言葉に、皆耳を欹(そばだ)てる。倉庫の外、遥か上空から、それは人々へと呼び掛けていた。

『吾々は、ローエングラム候旗下ロイエンタール艦隊である。
賊軍による、《ヴェスターラント》に対する全面地上核攻撃部隊を排除した。
現在、砂漠地帯に投下されたミサイルによる、汚染を除去作業中である。
建造物より八時間無いし十時間の外出を禁ずるものである。
繰り返す……』

不安は安堵に変わり、歓呼と化した。
『やはり、ローエングラム候は庶民(われわれ)の味方だった』
『これで、もっとマシな生活が出来る』
『貴族に搾取されるだけの時代が終わったのだ』
人々は地下倉庫の中で、家族と、または知人と抱き合った喜んだ。

長い時間を経て、やっと外に出る事を許された人々は、青紫に光る夜空を目にした。
不思議なその光は、砂漠から天を照らしているものだった。
その光を目にして、教師は笑いながら子供達に説明してやる。
「ご覧、対放射線フィールドだよ。本来は長時間使用する事は出来ないから、何隻分かのエネルギーを流用しているんだろうね」
安堵した後、オーロラを見損ねた事を悔やんでいた子供達が、目を輝かせながらその光に見入った。

「明るいねえ」
「こんな明るい夜、初めてだ」
人々の顔は、空よりも輝いていた。

だがその頃、先行型偵察艦からの映像を、歯噛みしながら見ている人物がいた。
誰あろう、『庶民の味方』ことラインハルト・フォン・ローエングラム本人だった。
偵察艦から送られて来た、自軍の艦艇をぶつける事でミサイルの軌道を変え、《ヴェスターラント》の民衆を救ったロイエンタール艦隊の姿を睨むうちに、白磁の頬にゆっくりと朱が昇った。同じく、その画面を見ていたオーベルシュタインが、字面程は窮した風も無く主君を見た。
「こうなっては仕方がありません。この救援映像を公開する事で、吾々の正義を　――　」
「判っている、卿に任せる」
煩わしげにそう言い切ると、ラインハルトは当り散らす代わりに映像を切った。
正直なところ、ラインハルトはロイエンタールのこの行動を裏切り行為と捉えていた。
但し、自覚無く、そして明確に憎悪の対象としていた。『墜ちている』自覚は彼には無い。だが、共に往く者として捕らえていたロイエンタールの叛意に　――　それを良心の目覚めとは、彼は受け取っては居なかったので　――　、ラインハルトはいらいらと書類を繰った。
そんな主君の有り様を、平静に見ていたオーベルシュタインは淡々と職務に勤しんだ。
「ロイエンタール卿への指示は、如何致しましょう」

「ふん、《ヴェスターラントの英雄》だな。ヤン・ウェンリーもかくや、だ」
鼻で笑って、しかしラインハルトは表情を引き戻した。
もはや、救援映像を宣伝工作に用いるしかない以上は、例え腸が煮え繰り返ろうとも奴を処断する訳には行かないのだ。
結局、ラインハルトは命令無視には目を瞑り、残りの賊軍の艦隊を平らげつつ帰等するよう命じる事しか出来なかったのである。

その頃、ロイエンタールは、既に《ヴェスターラント》から離れていた。
彼の心は最早、『ブリュンヒルド』にいる筈の親友の許に飛んでいたのだ。
どんな方法で、とか何者の介入で、などと言った事は最早瑣末な事に過ぎなかった。
今は只、ロイエンタールは手に戻る筈の光に心奪われた状態にあったのである。

6．禿鷲の城

キルヒアイス艦隊が、《ヴェスターラント》の攻防を知ったのはその翌日の昼過ぎ、公共の電波で帝国中に放映された、偵察艦の映像によってだった。

砂漠に湧き上がった、不吉なきのこ雲と無人艦を叩き付けてミサイルの軌道を変えるロイエンタール艦隊の映像は、確かにローエングラム陣営の良識と、大貴族の残虐性の対比となって人々の目に焼き付いた。

だが、同期の復調を喜ぶワーレンの横で、ジークフリード・キルヒアイスは複雑な思いに駆られていた。彼は、ロイエンタールが自分とラインハルトとを、憎んでいる事に気付いていたからだ。

あの日、あの嵐の夜に、

「親友を救って欲しい」

と訪ねて来たオスカー・フォン・ロイエンタールと共に、ブラウンシュヴァイク公の息の掛かった留置所に救出に行き、一端は彼、ウォルフガング・ミッターマイヤーを助け出した。

だが、無思慮な貴族の青年の銃の乱射から自分たちと　――　何より親友を庇って、彼は命を落としたのだ。

無残な拷問で、動く筈も無い身体で。その、知己となる筈だった青年と、何より彼を失い嘆くロイエンタールへの呵責から、キルヒアイスはジレンマに苦しんでいた。

カメラの位置から、一部からは「わざと攻撃させたのでは」という声もあったが、取り敢えずキルヒアイスはラインハルトの本隊に合流した。戦いは、もう殆ど終ろうとしていた。

ロイエンタールの旗艦から、総旗艦（ブリュンヒルド）に戻ったカール・リヒターことミッターマイヤーは、エアロック前で、鼻唄を歌いつつ自分を待っていたらしいガウェインに気が付いた。
場所柄から小さい声で歌われるそれは、ミッターマイヤーに酷く懐かしいものを思い出させた。

Auf Wiedersehen, nicht abschiedsrede.
Es versprchen ist, zukuenftig wiedeersehen.
Die spur eins traum, Da bleiben herz.
Nur einsam, Das herz ist sehe kalt.
Lang zeit, Sie moechte herz en immer, aber.
Ner ich waermen bin kuehl wange, Langzeit aber.

そこまで歌って、ガウェインは自分を見ているミッターマイヤーに気付いた。
「あ、少佐、お帰りなさい」
「ああ、只今、ガウェイン」
立ち止まっていた士官の何人かが、歌が終った為か三々五々歩き出す。
ガウェインの方は、ミッターマイヤーに歩調をあわせつつ、早速四時間の間の事を報告する。
「キルヒアイス提督が合流したんですけどね」
「ああ、俺も向こうで聞いたよ」
「なんだか、猛烈に雲行き怪しいですよ？」

ガウェインの言葉に、ミッターマイヤーはまさかと言いたげに足を止めた。
周囲をちらっと見てから、ガウェインは声を顰めてこう言った。
「ローエングラム公と、キルヒアイス提督が言い争っていたらしいですよ」
「どうして？！　二人が揉めなくてはならない事があるか？！」
「ほら、あの《ヴェスター・ラント》の件ですよ。偵察艦の位置から、どうも本当は見殺しにするつもりだったんじゃないかって、キルヒアイス提督が問い詰めたらしいんです」
その言葉に、ミッターマイヤーは立ち尽くした。
二人の仲を拗らせまいと、ロイエンタールに無理を頼んだと言うのに、どうしてこんな事になるのだろう。
その思いが、彼を艦内にあるキルヒアイスの居室へ向かわせた。

訪ねてみると、額に青筋を三つ、四つ切ったベルゲングリューンが、だが二人を笑顔で迎え入れた。
机に向かい、あの日のように沈み切ったキルヒアイスが俯いているのに、ミッターマイヤーはそっと声を掛けた。
「辺境平定、ご苦労様でした、キルヒアイス提督」
「ああ、リヒター少佐、ウェーバー曹長も」
ミッターマイヤーの顔を見ているうちに、ふとキルヒアイスは蜂蜜色の髪の青年を思い出した。
「私達は、人を見殺しにしてしまった事があります。きっと、私達と共に戦ってくれただろう人を」
その言葉に、ミッターマイヤーの心臓がドクンっと跳ね上がった。
キルヒアイスは語った。
嵐の晩に訪ねて来た青年将校の事、彼が自分達の初めての味方になる人物だった事、そして辿り着いた留置所での惨劇。

貴族の銃弾から、動けない身体で三人を庇い、命を落した青年の事。
「あの日から、私はロイエンタール提督にどう詫びればいいのか、判らないのです」
「それは違う！」
大声での否に、キルヒアイスもベルゲングリューンも彼を見る。
両手を硬く握り締め、ミッターマイヤーは否を繰り返す。
「ロイエンタールは間違っている。奴の仇は大貴族であって、卿らではない！！」
「リヒター少佐？」
はっと我に返り、ミッターマイヤーは慌てて一礼してその場を離れた。
その背中を見送るうちに、キルヒアイスは呵責が薄れると同時にある事に思い至った。現状、そして。
……もしや、ラインハルト様は、ミッターマイヤー少将に付いて何も思うところが無くて、それをロイエンタール提督は気付いているのでは無いだろうか？
ロイエンタール提督は、ラインハルト様の事を恨んでいるのではないだろうか、助けられなかった事、そして彼を悼まないあの方を。
キルヒアイスは立ち上がると、ラインハルトに面会を求め、同時にロイエンタールも呼び出した。
そして、ガウェインにもう一度、リヒター少佐を連れて来るように頼んだ。

ガウェインに呼び戻され、キルヒアイスの元に戻ったミッターマイヤーの目の前で、先に来ていたラインハルトとロイエンタールが対峙していた。
「何故、私の裁可を仰がず勝手な行動に出た」
「仰ぐ必要を感じませんでした。閣下は、《ヴェスターラント》を

見捨てる予定でありましたでしょう」
　さらりと切り返され、ラインハルトはぐっと詰まる。それに向かって、ロイエンタールは悪魔の如き冷笑と共に言葉を続ける。それは、三年前から抱えていた憎悪。
「そう、閣下には支配者としての明確なビジョンも無ければ、姉君とキルヒアイス以外に情を示す心も無い。
　吾々を庇って死んだ我が友の事を、閣下は小官を陣営に引き込む口実としか見なされなかった。
　あの時から、決めておりました。
　子供の我侭を押し通すつもりならば、その我侭の限りを尽くした結果を見せてやろう、この世の地獄を代価として。
　滅びてしまえばいいのですよ、この帝国も、私も、貴様も！」
　別に、今それを語る必要は無かった。だが、やっとミッターマイヤーを取り返せると考えていた矢先のこの会話故に、ロイエンタールは勢いに任せて叩き付けていた。
『切るなら切るがいい、もう貴様の事などどうでもいい』
　そう思い詰めての言葉に、ラインハルトの洗脳の一端が壊れた。が、その時だった。
　どかっと、頬に入った拳によって、ロイエンタールは二、三歩よろけた。両目から涙を零し、拳を握り締めてミッターマイヤーは叫んだ。
「俺が無念でなかったと思うのかっ！」
　そして長身である美丈夫の、襟髪を掴んで叫び続ける。
「あの時の俺が、何で三人を庇ったか判らないのか！　卿ら三人が力を合わせて、大貴族を倒してくれる事を望んだからだっ！！
　ロイエンタール、お前の気持ちなんて判ってやらない、やるものかっ！！」
　そう叫ぶミッターマイヤーの髪が、緋色から明るい蜂蜜色の金髪に取って代わる。そして見上げてくるのは、怒りに染まって紫がかった灰色の瞳。

「俺の思いを判ろうとしない、お前の気持ちなんぞ判ってなんかやるものかぁっ！！」
「ミッターマイヤー？」
「馬鹿野郎、ロイエンタールの大馬鹿野郎ぉ」
泣きながら繰り返すミッターマイヤーを抱き込み、その髪をロイエンタールはいとおしむ様に撫ぜた。
やっと、本当の意味でロイエンタールの心が、絶望から解き放たれた瞬間だった。
その姿を見ながら、ラインハルトは毒気を抜かれたように呟いた。
「どうやら、『獅子身中の虫』を飼っていたようだな」
「いいえ、ロイエンタール卿は『虫』などではありません、ラインハルト様」
キルヒアイスは数年振りに、すっきりとした顔で笑い掛けた。その顔に、ラインハルトの胸にすとんっと落ちるものがあった。そう、自分の理解者はキルヒアイス（かれ）だったでは無いか。
「例え心に怒りがあったとしても、それでも彼は戦ってくれました。そしてこれからは、力を合わせて戦える筈です」
その言葉に頷くと、ラインハルトは漸くロイエンタールから離れた、死んだ筈の男に向き直った。
「済まなかった。私はあの時、目先の利に気を取られ、貴官の事を悼む事をしなかった。許して欲しい」
その言葉に、ミッターマイヤーは涙を拭いながら笑った。
「気にしていません。貴方方がご無事で良かった」
とても優しい、暖かい大人の笑顔だった。
「ローエングラム閣下、ロイエンタールはこれまで以上の戦果を上げて見せます。ええ、こいつの力量はこんなものではありませんから」
なあと、同意を求める灰色の瞳に、金銀妖瞳（ヘテロクロミア）の美丈夫は軽く頷き、そしてロイエンタールはラインハルトに向かって敬礼した。
それは、あの日以来始めてロイエンタールが見せた、心からの敬

礼だった。
（ああ、良かった）
頷き返すラインハルトと、やっと笑顔の戻ったキルヒアイスとを見ていたミッターマイヤーの視界が、急に暗くなった。
あっと思う間も無く、その場に崩れ落ちたミッターマイヤーを慌ててロイエンタールが抱き抱える。
そして足の異様な熱さに、意を決してスラックスの裾を裂いたロイエンタールと、手近にあった救急キット（ファーストエイド）を持って駈け寄ったキルヒアイスは、脹脛（ふくらはぎ）から足首に掛けて走る真っ赤な痣に息を飲んだ。
「軍医を呼んできますっ！」
そう叫んで、今まで隅で大人しくしていたガウェインが、部屋から飛び出し全力で走り出す。
その後ろから、意識の無いミッターマイヤーを抱え上げたままロイエンタールが続いた。

冷却パッドの替えを取りに、病室から出たガウェインをアントン・フェルナーが呼び止めた。
普段はきりっと吊りあがった黒い眉が、力無く下がっているのを見て、フェルナーは気遣わしげに問うて来る。
「ウェーバー曹長、リヒター少佐の容態は？」
「あまり芳しくありません」
首を振ると、ガウェインは歩きつつ小さな声で病状を話した。
「軍医殿のお話では、単に表面的に塞がっただけの傷が、この間の白兵戦で負荷が掛かった為に発熱に至ったとの事です。それから、ここ数日熱が続いていた筈だけど、緊張状態が続いた所為で自覚症状が無かったのではないかって、仰っていました」
「そうかい。じゃあ、暫く起きられないんだね、少佐は」
「ええ、目が醒めても、ぼうっとなさっている時間が長くて」

そう頷くと、ガウェインは話題を切り替える事にした。
「そう言えば、どうやら戦闘終了しそうですね」
「ああ、主力のぶつかり合いは終ったしね。いやあ、ロイエンタール卿が別人みたいに活躍していたよ。そう言えば、『禿鷲の城』（ガイエスブルグ）要塞に降伏勧告を出したそうだから、時間の問題だろうね」
そう語ったフェルナーは、仕事の続きを片付けにそのまま歩いて行った。
その心細げな背中を見送ると、ガウェインは再び備品室へと歩き出した。
この時、ガウェインは同盟へは自分一人で戻る事になるかもしれないと、思っていた。
そして同時に、いかにしてミッターマイヤーの妻子を帝国に送り帰すかも考えていた。
彼の目には、最早ミッターマイヤーが帝国から離れられるとは思えなかったのである。

帝国暦四八八年九月、遂にガイエスブルクは陥落する。
その際、ウィリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカッツは副官の奨めに従い、捲土重来を図り自由惑星同盟へ向かって亡命する。
そして、アンスバッハの名前でオットー・フォン・ブラウンシュヴァイクの死と降伏が伝えられると、帝国全土に戦闘の終結が報じられた。
歓呼の中、人目に付かぬ様にミッターマイヤーは要塞内の医務室へと運ばれた。
懇々と眠り続ける親友の手を握り、ロイエンタールは彼の回復を祈り続けた。
しかし、その祈りを嘲笑うように、ミッターマイヤーの体調は乱上下を繰り返していた。薄っすらと意識が戻ったかと思えば、又昏

睡状態に至ると言う状態で、ロイエンタールのみならず元帥府幕僚達全員の気を揉ませる事態にあった。
そんな中にあって、一つ見落とされたものがあった。
それは、『洗脳』状態にあったラインハルトが、深く考えずに布告した『全将官の銃器類不携帯』の命令である。それは、ほぼキルヒアイス一人に対する嫌がらせに等しい布告であり、組織の一元化を狙うオーベルシュタイン、そして組織崩壊を画策していたロイエンタールとが奨めたものであった。
そしてそのまま、運命の輪は音を立てて大きく回ったのである。

九月九日。貴族連合のかつての牙城であった『禿鷲の城』要塞において、ローエングラム軍の戦勝祝賀会が行われようとしていた。
昏睡と半覚醒の間を漂っていたミッターマイヤーは、何かに急かされるように目を覚ました。そして重い体を起こして、自分がどこか大きな人工天体の中にいるのに気が付いた。
「少佐、気が付かれましたか？」
「ガウェイン？　ここは？」
「ガイエスブルグ要塞の中ですよ。貴族連合が降伏したから、ローエングラム候旗下の艦隊は入港したんです。少佐の治療には、船の設備よりこちらの方がいいだろうって話になって」
暫くガウェインの話を反芻していたミッターマイヤーは、火が付いたように顔を跳ね上げた。
「ガウェイン、今日は何日だっ！」
「九月九日ですよ？　確か、もう戦勝祝賀会も始まって……」
そう言ったガウェインの両腕を、ミッターマイヤーは蒼白になりながら掴んだ。
「しまったっ！」
「えっ！？」
驚くガウェインを押し退け、ミッターマイヤーはベッドから降り

ようとした。
体中に貼り付けられた検査用のセンサーを引き剥がし、点滴用のドレインを引き抜こうとするのを、慌てて年下の部下は押し止める。
「待って下さい、一体何がっ」
「暗殺だっ！　ガウェイン、キルヒアイスとローエングラム候が危ないっ！」
その言葉に、見た目より豪胆なガウェインの顔から血の気が引いた。「知らせて来る」と、駆け出したガウェインの後から、祝勝会場を目指してミッターマイヤーも走る。今まで寝込んでいたのが嘘のように、ミッターマイヤーは真っ直ぐ『あの時』と同じ場所を目指して走った。
警備状況の確認をする為に、一人会場から出ていたケスラーを見つけてガウェインは声を張り上げた。
「敵将の検分を中止させてくださいっ！　昔あったんです、敵の大将首を手土産に降伏する振りをして、首実検する王を暗殺って。それも一件や二件じゃ無いっ！！」
だが、丁度その頃アンスバッハの順番となっており、主君の遺体からロケットランチャーを、まさに取り出そうとする瞬間であった。
そこに、バンッと音を立てて扉を押し開いたのがミッターマイヤーだった。
取り押さえようとする警備兵を振り払い、ミッターマイヤーはアンスバッハへと飛び掛った。
その時、キルヒアイスも降将となった軍人の手に握られた、組み立て途上の重火器の部品を見出し、咄嗟の判断で反対側から飛び掛った。
周囲の者達が動けるようになった時には、キルヒアイスが関節技でアンスバッハの手足を封じ、ミッターマイヤーは指輪型レーザーを仕込んだ右手を押さえ込み、毒を飲まないよう、左手を相手の口に突っ込んでいた。
が、ミッターマイヤーの左手が噛み切られそうだと判断したロイ

エンタールがその手を引き抜いた為に、その一瞬でカプセル入りの義歯を噛み砕いたアンスバッハは息絶えてしまったのである。
「キルヒアイスっ！　ミッターマイヤーっ！　二人とも無事かっ！？」
オーベルシュタインに支えられつつ、ラインハルトが叫ぶ。
それに笑顔でキルヒアイスは答えたが、ミッターマイヤーの方は抱き抱えたロイエンタールの腕の中から、動く事が出来なかった。
熱が引き切らぬまま、全力でここまで走り、肉弾戦を演じたミッターマイヤーの身体は本当の意味で深いダメージを受けてしまったのだ。
だが、その身体で、閉じようとする瞼を無理やり開いて、ミッターマイヤーはロイエンタールとラインハルト、そしてオーベルシュタインへと視線を動かした。
「リヒテンラーデを捕らえるんだ。先手を取られる前に」
ゴールデンバウムを、完全に倒す為に。
言外の言葉に、ロイエンタールは駈け付けた軍医にミッターマイヤーを預け、そして問い掛ける。
「今度は待っていてくれるか？」
「ああ、勿論」
ストレッチャーに乗せられながら、己に頷いたミッターマイヤーに笑い掛けると、金銀妖瞳の美丈夫は己が唯一の主を振り仰いだ。
「ローエングラム候暗殺未遂犯、リヒテンラーデ公の逮捕し、公文書発行を停止させる為国璽を確保してまいります」
「卿の言や良し。オーベルシュタイン、リヒテンラーデに俺が怪我して動けないと言っておけ。その所為で全艦隊動けないとな」
その言葉に送り出され、ローエングラム陣営の艦隊は大挙して帝都（ディン）へと向かった。決起の為に策謀中であった、リヒテンラーデ公とその賛同者は纏めて逮捕され、こうしてラインハルトの地盤は完全に固められる事となった。
只、『あの時』のように一〇歳以上の男子全員などと言う苛烈な

ものではなく、処刑されるのは成人男性のみ、女子供、老人達はもう少しマシな状態で辺境の流刑惑星へと送られる事となる。
そう、ミッターマイヤーの知る歴史と、世界は又少し形を変えたのである。

しかしその日から、そう『禿鷲の城』要塞から帝都(オーディン)に戻っても、ミッターマイヤーに回復の兆しは見えなかったのである。

7．勇者（ベーオウルフ）の帰還

『禿鷲の城』（ガイエスブルグ）要塞から、帝都の大病院の集中治療室に移っても、ウォルフガング・ミッターマイヤーの病状に変化は無かった。

医師の診察によると、古傷が原因の発熱が長く続いた為に、敗血症の一歩手前まで来ているとの事だった。

ずるずると続く熱は、着実にミッターマイヤーの体力を奪い、生命維持装置の数値はどれも芳しいものではなかった。

オスカー・フォン・ロイエンタールは、親友がストレッチャーで運び込まれた病室で寝起きするようになっていた。

暇を見ては手を握って話し掛け、仕事が終れば飛んで帰って来て、意識の戻らぬ親友の世話に明け暮れた。

一応、ガウェインが従卒としてそのまま看護に就いていたものの、ロイエンタールにはどうでも良い事だった。

ミッターマイヤーの方も、遅遅として回復する兆しの無い身体に困り果てていた。

しかし、同時にぼんやりとした、まるで夢の中のような感覚で見詰める見舞い客の姿は、つるべ落しにミッターマイヤーの『現実感』と言うものを奪い続けていた。

ケンプ、シュタインメッツ、レンネンカンプ、ファーレンハイト、ルッツ、ベルゲングリューン、キルヒアイス、ラインハルト、オーベルシュタイン、そしてロイエンタール……。

もう、二度と会えない筈の人々。彼らと居るという事実が、ミッターマイヤーの中の何かをゆっくりと蝕んでいた。そう、彼の中の、自覚無いまま壊れていた部分にそれはひたひたと染み渡り、彼を意識の闇に引き込もうとしていた。

だが、十月最初の朝、ミッターマイヤーは夢を見た。
何時もの現実と幻覚のない交ぜになったものではなく、それは小さな男の子の夢だった。
『お父さん』
そう、ミッターマイヤーに呼びかけて、男の子は手の中に飛び込んで来た。
焦げ茶色の髪の毛と、成層圏の青色の目をした、三つか四つの男の子。
「フェリックス？」
ぎこちなく名を呼ぶ養父に、男の子は満面の笑みを見せる。と、何かに気が付いて、その子は手の中からぱっと走り出た。
『ヤンてーとくぅ！』
走って行く息子の向こう側に、テーブルに行儀悪く腰掛け、紅茶のカップを手にした青年の姿が浮かび上がり、ミッターマイヤーは詰めていた息をゆっくりと吐いた。

『運命なんて、信じないよ。宿命なんてもってのほかだ』
不意の言葉に我に返る。
何時の間にか、ミッターマイヤーは第十三艦隊旗艦の、食堂のテーブルに就いていた。その前には、紙コップに入ったコーヒーを不味そうに啜りながら、ヤン・ウェンリーが座っていた。
『良く、そう言う事を言いたがる人が居るけど、私は嫌いだよ』
思い出す。それは、あのアムリッツァ会戦のちょっと前。
先行した艦隊に、補給物資を持って行ってやっている、ほんのちょっとの休息時間の時。
『出来れば、自分の責任で決めた事だと思いたいね』
どんなに狭い選択でも、己の選んだ物で、己で決めた事だと。
ああ、そうだった。

ミッターマイヤーは、泥の底から起き上がるように意識を浮上させた。
あの時、ミッターマイヤーは思ったのだ。
『ヤン・ウェンリーは、死なせてはいけない人間だった』と。
確かに自分は、帝国による銀河統一を夢とし生きて来た。それでも彼の人となりに、ミッターマイヤーは思ったのだ。
「銀河には、この人も必要なのだ」
と。それに、同盟が存在すれば、将としてロイエンタールは必要とされ続ける。……自分が存在せねば、ローエングラム候とキルヒアイスの次に位置する将は彼しかいないのだから。
不意に胸に落ちる。

俺の、ここでするべき事は終ったのではないか？
これからは、同盟でせねばならない事が無いか？
そう、皆で幸せになる為に。二つの国が、共存して行く為に。

そう考えた時、ミッターマイヤーはこの十数日が嘘のように、自然に目覚めたのである。

ミッターマイヤーの体を拭き清める為に、外の給湯室からバケツとタオルを持って来たガウェインは、ベッドから起き上がった青年に目を丸くした。
「ミッターマイヤー少将、大丈夫ですか？！」
慌てふためく年若い部下に、ミッターマイヤーは更に驚かせる発言をした。
「ガウェイン、悪いけど準備して貰えるかい？」
「じゅ、準備って？」
「決まっているじゃないか、同盟に帰るんだよ」
ミッターマイヤーのその言葉に、ガウェインは物問いたげに視線

を投げ掛けた。それに向かって、ミッターマイヤーは灰色の瞳を細めて笑った。
「ヤン提督に、報告する事がたくさん出来た。それに、私は妻と子に会いたいんだよ」
「……判りました、二分で準備します」
手早く荷造りしている横で、ミッターマイヤーは薬包紙のしわを伸ばし、ペンで短く走り書きを作って枕の上に置いた。

Du Reuenthal,
Hoffentlich sehen wir uns wieder.

W. M

街は、まるで時が止まったかのように静かだった。二人が出て行くのを知っていたかのように、街行く人も地上車すらも影を見せなかった。
その街角に、ガウェインの歌声が吸い込まれて行く。

Auf Wiedersehen, nicht abschiedsrede.
Es versprchen ist, zukuenftig wiedeersehen.
Die spur eins traum, Da bleiben herz.
Nur einsam, Das herz ist sehe kalt.

Lang zeit, Sie moechte herzen immer, aber.
Ner ich waermen bin kuehl wange, Langzeit aber.

ただ一人、擦れ違った若い憲兵が、敬礼しながらミッターマイヤーに声を掛けた。
「リヒター少将、どちらへ？」
「私は少佐だよ？」
「いえ、四階級特進が決まられたそうではありませんか。復帰次第、貴方は少将位に就かれますよ」
「そんな事は無いよ」
そう笑って、ミッターマイヤーはガウェインと共に宇宙港に向かう無人タクシーに乗った。
そして、本当に誰にも咎め立てされる事も、邪魔される事もなく、迎えの待つ辺境への定期便に乗った。
これから二隻の貨客船を乗り継ぎ、イゼルローン要塞へ ――
新たな故国に帰るのだ。

その定期便の、二人の取った個室（コンパートメント）の三つ向こうで、占い師が札を繰りながら笑っていた。
「賢い子供は知っている。自分が何をすべきかを、ね。だから私は、彼には何も言わない、必要無いからね」
彼が繰ったカード、それは『戦車』だった。
意味は『勝利』、『独立』、『確信』、『能動性』、そして『旅立ち』を示すカードであった。

その頃、仕事から帰って来たロイエンタールは、もぬけの殻となった病室でミッターマイヤーからの挨拶を握り潰していた。

「何故だ、ミッターマイヤー。何処に行った？　お前は還って来たのではなかったのか？！」
彼の血を吐くような言葉に、思いも掛けぬ言葉が返される。
「ああ、リヒター少佐なら、再療養の為、軍籍を離れてフェザーンの病院に戻られるそうですよ」
看護士の言葉に、ロイエンタールは言葉を失い、そのまま立ち尽くした。

数日後、ロイエンタールは渋る元同期を引き摺り込んで、秋の嵐の中墓荒らしに掛かっていた。
数日のうちに、まるでミッターマイヤーが居たのが白昼夢だったかのように、人々の記憶からその存在が薄れている事にロイエンタールは気付いたのだ。
単に『カール・リヒター』と言う人物がいて、療養の為に戻って行ったという話に変わってしまった事に何者かの介入を疑ったロイエンタールは、事実確認の為にミッターマイヤーの墓を暴きに掛かったのだ。
「おい、許可取っているのか？」
暇そうだからの一言の許に、首に縄掛けて連れて来られたアウグスト・ザムエル・ワーレンは、轟く雷鳴に逆らうように声を張り上げてみる。
だが、ロイエンタールの方は黙々とスコップで土を掻き出し続けている。
諦めて掘り続けるうちに、雨風に負けぬ二人の声が聞こえて来た。地声の大きいビッテンフェルトと、雨音の所為で知らずに声を張り上げているミュラーだった。
「どうして、いきなり墓荒らしなんてやろうって言うんです！」
「だって、おかしいとは思わんか、リヒターの奴、ミッターマイヤ

ーに似過ぎてるしっ！」
「て、言うか、先客がいらっしゃるようですよっ」
「お、ロイエンタール」
二人の声をまるで無視して、ロイエンタールはスコップを振るう。と、その時、がちんっとスコップの先が何かに当った。
慌てて四人がかりで土を払うと、そこにミッターマイヤーの名前が入った、まだまだ朽ちる様子の無い棺が現れた。
骨も残さず官舎ごと燃え尽きた妻の遺品として、彼が持ち歩いていた写真を握って遺体（ミッターマイヤー）が納まっている筈の棺である。
ロイエンタールがスコップで棺の蓋の鍵を叩き壊す。
そして開かれた棺の中身は、腐った遺骸……ではなく、すっかり乾いてかさかさに干からびた葬式の花の残骸と、人が寝かされた後の残るクッションだけだった。
「ふっ……ふはははは」
呆然と棺の中を見ているうちに、ロイエンタールが笑い出した。
すわ発狂したかと、抱き合って振り返った三人を放り出し、ロイエンタールは勝利を確信した顔で笑い転げた。
「生きている、ミッターマイヤー、やはりお前は生きているんだなっ！！」
何が、どうなって、どう言う方法かは最早どうでも良かった。
この瞬間から、ロイエンタールのミッターマイヤー追跡奪還が始まったのである。

7．勇者（ベーオウルフ）の帰還（後書き）

正直に言います。
この副題名を使う為に、この第二部を考えました。
無理があるよね、帝国同盟とんぼ返り。でも私は後悔しない。

寧ろ、ガウェインに歌わせた曲の方が後悔まみれ。
日本語の曲は何かだし、英語やドイツ語の曲を載せるのはちょっと著作権が怖い。
そこで、日本語をドイツ語に意訳……と言うより単に単語を並べただけなんですが、何とか曲っぽくでっち上げて見た代物です。
なんで、ドイツ語詳しい方、出来れば生暖かくそっとしておいて欲しいです。
後、元歌が何かは内緒。
ヒントは私の個人サイト――と言いたいけど、検索避け掛けているので、角川映画の映画主題歌とだけ。
これと出だしでほぼ判るよね。

この話はここで終わりですが、物語はまだまだ続きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9470o/

永遠は刹那のなかに　　第二部

2010年12月19日12時21分発行